
「 I S 」 《空を駆ける超兵の話》

かねごん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「IS」《空を駆ける超兵の話》

【Nコード】

N5086W

【作者名】

かねこん

【あらすじ】

＊注意＊ この作品は純粋なIS作品ではありません。おまけに自分が以前に執筆したりリカルなのは作品の続きなのでオリジナル要素が沢山です。それでもよければ…ご覧いただきたく、存じます。アレルヤがなのは達と別れて2年…人類は外宇宙からきたELSの侵攻により最大の危機に瀕していた。ソレスタルビーイングは地球防衛、ELSとの対話の為にラストミッションを開始する。アレルヤ・ハプティズムはマリーパーファシイとともにガンダムハルートで出撃するが…敵の猛攻に徐々に押されていき……。

二次創作です。苦手な方は回れ右してお帰りくださいね？

第01話 最終決戦からの始まり（前書き）

場面は劇場版での最終決戦です。

第01話 最終決戦からの始まり

アレルヤside

「ぐっ…！このお…！」

ELSに同化された左腕をパージして右腕のGNサブガトリングガンで攻撃、爆破する。今ので武装は右腕のGNサブガトリングだけになってしまった。

「マリー！先に脱出して…！」

「アレルヤは…？」

「ハルトの自爆システムを発動させる！だから早く…！」

「…、わかったわ！」

僕達は殆どの武装がELSによって同化されてパージ、あるいは破壊されてしまったガンダムハルトを放棄して脱出、自爆させる事を決めた。

「アレルヤ、急いで！」

「ああ！」

自爆システムを起動させて、マリーに続いて急いで脱出…しようとした矢先に1体のELSがマリーに狙いをつけて突っ込んで来た！

「っ…この距離じゃ…！」

「マリーを！マリーに、触れるなあああああ…！」

僕はスグに操縦席に座り直してガンダムハルトをマリーの盾にするように動かした！

「ぐああっ！？」

「アレルヤ！」

ELSが機体にぶつかってコックピットが激しく揺れる。…このまま機体を同化させる訳にはいかない。相手は、ELSは取り込んだ機体に擬態する事が出来る。ガンダムが擬態されれば戦場は更に悪化してしまう！

「させる訳には…いかない！」

パキッ、パキキッ、ピキッ…

…金属音と共に目の前のスクリーンからELSの侵食が始まる。

自爆システムがちゃんと発動しているのを確認して、僕は脱出するために操縦席のパネルを操作してコックピットのハッチを開けようとしたけど…

「そんな！？開かない！？」

パネルには；Error；の表示が出ている。ELSに侵食されたのか！？

「このままじゃ脱出が出来ない！レント！」

「久しぶりといきなりだな！？アレルヤー！！」

僕の三つの人格の1人、レントがデバイスのアリオスを使って転移魔法を急展開する。侵食されつつあるモニターの端にマリーの姿が見えた。…機体と距離があるからマリーは爆発に巻き込まれない筈だ！

「とっとしやがれ！此处でおっ死ぬつもりか！？」

「分かってる！急かすな！！」

僕の三つの人格の一人、ハレルヤが叫ぶ。自爆までのカウントは三秒を切った！

レント「よし！発動！！」

レントの魔法発動と自爆システム発動はまったく同時だった。けれどコンマ数秒でこっちが早かった筈だ……！

（…くっ…意識が…持っていられる……！）

急激かつ、久方ぶりの魔法の使用と戦闘での緊張と疲れで僕は意識を失った。

第01話 最終決戦からの始まり（後書き）

次回へつづく。

ちなみにもう一つの作品の方が主になるのでコチラはかなりの不定期更新になりますのであさからず。

第02話 出会い（前書き）

原作一年前くらいにするか、原作と同時期にするか…悩みます。

第02話 出会い

No side

アレルヤが飛ばされた同時期、国際IS委員会はある欠陥ISを日本に持ち込んでいた。

ISは現在進行形で進化する兵器の為、欠陥という言葉は不適切かもしれない。

だが、このISはまさしく欠陥だった。女だろうと男だろうと誰にも反応しないからだ。一度は全部初期化した結果は同じだった。

委員会は苦悩した。せっかく金を注ぎ込んで作ったISがガラクタになってしまいかねない。

そこで委員会はある手段に出た。苦肉の策にしては、とんでもない博打を打ったのだ。

「このISを動かせた者はこのISをその者の専用機とし、国際IS委員会直属のパイロットになる権利を得るものとする」

そしてこのISは適性者を見つける為に、IS学園へと運ばれる事になるのだが…。

アレルヤ side

「うぐっ…ここは…」

飛んでいた意識が戻ってきて、目を開けようとしたら光の眩しさに少し目が眩んでしまう。

「…ここ…何処？」

そして寝ていた身体を起こして周りを見る。海があり、太陽があり、人はいなかった。僕は砂浜に寝ていたらしい。服はパイロットスーツのままだった。

「ねえレント、僕たちは何処に飛んだんだい？」

「わからん。私は転移座標をプトレマイオスに合わせて飛んだのだが…？」

どうやらレント本人にもよく分かってないみたいだ。立ち上がって更に周りを確認する。

目の前は海、後ろは急斜面の崖で登る事は無理そうだ。

「とりあえず、海岸沿いに歩いてみようか。何かあるかもしれないしね……」

「二年前みたいに別世界に飛ばされたりしてなア？」

ハレルヤの言葉にそうかもしれないと思った。ソレを踏まえて行動しようかな。なんだか嫌な予感がするしね……。手を握り締めようとすると自分が何か持っていたのに気づいたので見てみると……

「！……アリオスが……！」

デバイスのアリオスは待機状態のプレートに所々にヒビが入り、とても見えそうになかった。

「はぁ………前途多難だよ、まったく……」

とりあえず、歩こう。

「ここは…街かな？」

しばらく海岸を歩いてしていると車道を見つけ、その道を辿ると都市のような場所についた。

ちなみにさすがにパイロットスーツのままじゃ不味いと思ったから服はレントのバリアジャケットのコートをとったモノだ。少し派手かもしれないけどパイロットスーツのままの方が変だしね。デバイスはバリアジャケットのポケットに入れておく。

「ここなら情報が得られるかも…」

「だいいいのだな…」

そう言いながらも、僕はどこか確信していた。

（ここは異世界なんだろうなあ…）

そんな事を考えながら、ビルが建ち並ぶ街を歩く。

しばらく歩いているとビルのひとつに大型の液晶テレビがあったので、僕は情報を得る為にもしばらくテレビを眺めている事にした。

（うん、やっぱり…違う世界だった…）

テレビから得た情報には知らない情報しかなかった。それにE L S
大侵攻ですらニュースでやっていない。

つまり此処は…いや、この世界は別世界である事はほぼ確定だろう。

（どうしよう…そういえば、マリーは大丈夫だったのかな？）

これからのこと、元の世界に残してきたマリーのこと、いろいろ悩
んでいると何か周囲が騒がしい事に気づいた。

（ん？なんだろう？）

そして来たときからの嫌な予感は当たってしまった。

ただし…それは異世界に来てしまったとかそんな問題じゃなく…

「危ねエ!!!？」

自分たちに向かって突っ込んできたトラックだったのだけど。

? s i d e

「あちらからの救援要請だと？」

「はい！現在、この学園に搬入予定だった委員会のISを運搬していたトラックが襲撃を受けているそうです！」

…何処のどこかは知らんがIS学園の近くで襲撃をかけるとは…
目的は強奪か…？

「私が打鉄で救援に向かう」

「待つて下さい、織斑先生！敵が未確認な以上、それは危険ですよ！」

幼さが残る顔立ちに眼鏡をかけた女教員、山田先生が悲痛な声をあげる。

「だが、誰かがやらねばならない。それが私なだけだ…すぐに出る！他の教員は援護をしてくれ！」

さて…不謹慎ではあるが、久々に思いつきり暴れる事ができそうだし…。
そんな事を考えながらISスーツに着替える為に更衣室に向かった。

ハレルヤ side

トラックがぶつかって割れたビルのガラスの破片を軽く払って立ち上がる。

「まったく…何処の馬鹿だア！？人様に突っ込んで来やがってよお！
」

くそつたれが…おかげで避ける為に無理に相棒と代わっちまったからアレルヤは気を失っちまうしょ…。

原因のトラックを見るとビルに当たった後、少し先に止まっていた。
…横転してだな。

横転した時に開いたんだろう、コンテナの後ろの扉が開いていた。

…面倒事は御免だ、とつとと離れるか…。

俺は背を向けてその場から離れようとして、出来なくなった。

ダレかが俺の脳量子波に干渉してきやがったからだ。

（アア？…なんだ、テメエは…？）

言葉じゃねえな、発してるだけか？だが…異世界で脳量子波を感じるとは…あるいは脳量子波に似た何かか…

ガタ、ガゴン！！

背後にあるコンテナから、何かが落ちたような音がした。

（あ？…そうかよ、来いってことか？）

何か、面白そうだ。

俺は踵を返してトラックに向かい、コンテナの中に入る。中は薄暗いが…奥に何かあるな。

俺はその何かに触れると、ぼんやりと発光し始めた。

「ハン…。そうかよ…そういう事かよ」

何も知らない俺の頭に様々な情報が流れてきた。だが…苦しくはない。

大抵、こういったヤツは頭がはじけ飛びそうなくらい痛いんだがな
ア…

「いいぜ…やってやるよ…飛びたいなら、俺が使ってやる」

俺がソイツに乗り込もうとしたら空間モニターが現れ、文章を表示

してきた。

<データ、コアが破損しています。代わりのデータの提供を求めます>

「いきなり要求かよ…。まったく…代わりのデータね…」

呆れてポケットに手をつ込むと固いモノが手に触れた。引っ張り出すとそれはデバイスのアリオスだった。

「コレ、いけんのか？」

後ろ腰の装甲がスライドして挿入口が出てきた。とりあえずソコにデバイスを突っ込むとデバイスが飲み込まれ、機体が発光し始めた。

<データ確認…ロードします…初期化、最適化をします、搭乗してください>

「はいはい、と」

俺はソイツに乗り込むと装甲が身体に装着され、フィットしていく。

<初期化、最適化を開始します…完了まで180秒>

目の前の空中モニターに様々な情報が表示される。…ほー、なかなかいい感じじゃねえか…

初期化、最適化を完了。未確認機接近、コチラを攻撃目標にされました

おうおう、いいぜいいぜエ…！面白れエじゃねえか！最高の展開じゃねえか！

「肩慣らしには丁度いいな…テメエ、名前は？」

形式番号X-003、機体固有名称はキュリオスです

「（X「エックス」ね…俺たちと同じ世界の意味で言ったら試作機ってどこかア？）しかし、キュリオスねえ…」

なんの因果か…まさか、かつての俺らのガンダムと同じ名前とはなあ…

「ま、そんなのどうでもいいか。んじゃ…行くぞ、キュリオス！！」

手に持っていたライフルで壊れかけの扉に向けて撃つ。扉がさらに

ボロボロになって吹き飛び、俺は外に出て飛び上がった。

「さあて…敵は何処だあ？」

所属不明ISを3機確認。1機ら3時の方向にて静止中、残り2機は8時方向から接近

はん… たったの3機か。慣らしには丁度いい。

こちらの装備を確認しますか？

「ああ…確認しとくか」

何があるのか気になって俺は空中モニター情報に出てくる武装を見る。

…なんだこりゃ。まんまガンダムキュリオスの武装と同じじゃねえかよ…。

データ端末からさらに別のデータを確認、データをロードしますか？

「あ？任せる…。ふん、来たみたいだな」

上を見上げると黒髪の女が空に浮いていた。…ちよろいな。

「行くぜエ!!」

了解

スラスターを吹かして一気に空へと上がる。さあて…どうやって戦おうか!

第02話 出会い（後書き）

IS設定は後日…

第03話 戦闘（前書き）

お待たせしました。

第03話 戦闘

?Side

「ほう…アレが委員会のISですか」

高層ビルの一画から、私は機体のセンサーを使って空に上がってきたターゲットを見る。オレンジと白のIS、国際IS委員会の作った、X-003「キュリオス」

「しかし…委員会がISを強奪しようとするとは、本国も無茶をしますね」

ま、さりげなく強奪の邪魔はしましたが。私はつねに強い者と戦いたいのに、本国は首を縦に振らない…嫌がらせもしたくなる、というものです。

「キュリオスの相手をしたくはありますが、学園も動いていますし、正体を知られる訳にもいかない。…素直に帰りますか」

あんまり此処にいても仕方ないですし。その場でISを解除してピ

ルの屋上に着地。そのまま返して出口に向かう。

ゾク…！

「！？」

突如、背中から言いようない寒気を感じた私は振り返る…だが、誰もいなかった。

「…なんだということです、まったく…」

いいようのない、この感触をのちに私は知る事になる。この時、感じた寒気の正体を…

ハレルヤside

停止していた機体の反応消滅。ISを解除した模様

「ハン…腰抜けめ」

あっさりと消えた反応にがっかりした。最初から来んなよ…

残り二機はなおも接近

残りは闘う気らしいな。ま、この先どうなるかわかんねえし…だって
たらやる事あ1つだろ！

「楽しもつぜ！なあ！キュリオス！！」

千冬side

学園に運ばれる予定だったIS、キュリオスが空に上がってくる。
まさか起動されるとは…

「強奪されたか。私がヤツと接触する。リース先生は援護を」

「了解しました、織斑先生」

同行してきたリース・アイリス先生を残し、私は奴に近付く。さて
…キュリオスを動かしたのはどんなヤツなのやら…

「そのIS、その場に止まれ」

私の指示に従ってキュリオスはその場に止まる。大人しく従うとは…何かの罠か？

「私はIS学園で教師をしている織斑千冬という者だ。そのIS、キュリオスは国際IS委員会から学園に運ばれていたモノであり、貴様は強奪犯である事は明確だ。おとなしく投降しろ」

キュリオスのパイロットは黙ったまま、私を見ている。…まで、あの体格、もしか…搭乗者は男か？

（ISを動かせる男が、いるというのか？）

アイツはそんな事を言っていなかったが…。いや、今は置いておこう。目の前のヤツが敵か味方かわからない以上、その考えは無駄だ。

「なあ、黒髪の女」

「…私は名乗ったのだが？」

「テメエの言い分は理解した。けどよお…テメエが何であれ、こっ

ちはテムエが何処の誰それ何て知らねんだよ。ソレに…このキュリオスだがコイツがテムエ等を未確認と判断してる以上、おいそれと従う訳ねえだろうが?」

私の名前はスルーか。しかし…なるほど、確かに相手の言い分も理解できなくもない。

「ならば、お前はとうすると?」

私は打鉄の近接ブレードを手に握る。

「わかってんだろ?」

「ふっ…。ああ…わかっているさ」

キュリオスのスカート付近の装甲から白い棒のようなものが出てきて、奴が右手でソレを取るとソレは先端からピンク色の剣を出現させた。

「（雪片とよく似た武装か?）珍しい武器だな、レーザーの類いか?」

「さあな…ソレはやってのお楽しみだ!」

急激な加速で接近してきたキュリオスの剣を近接ブレードで受け止める。

「なっ！？く！ふっ！」

「おっ？やるじゃねエか！」

一瞬のつばぜり合いから少し力を抜き、瞬時に押し返す。その反動を利用して私自身も下がり、近接ブレードに目をやると…

（ブレードが溶けた、だと？）

私が奴から直ぐに離れた理由、それは武器同士が当たったにも関わらず手応えがおかしかったからだ。長年積み重ねた感覚に間違いは無かった。近接用ブレードが少しではあるが刃の部分が溶解していたからだ。

（高出力のレーザー…いや、ビームサーベルか！）

委員会め、ビームサーベルを装備しているとは聞いていないぞ！

（このままではコチラが討ち負けるのは必至か）

「なんだあ？怖じ気づいたのかあ？」

チツ…腹の立つやつだ。ソコまで言うのなら…剣の速さで対処するまで！

「フウ……シッ！」

息を吸い吐き出す瞬間、私は瞬時加速「イグニッションブースト」を使い奴の横に移動し剣撃を打ち込む！

「はあああ！」

「うお！？マジか！！！」

奴は動揺したがとつさにシールドを展開。私の一撃を防いだ。

「残念だったなあ。不意討ちは失敗だ」

「なに、そうでもないさ。アイリス！」

「狙い撃ちます！！！」

後方で待機していたリース先生の握るスナイパーライフル「LZ-

デイトライト」からレーザーが何発も放たれ、キュリオスを掠める。

「仲間がいたのかよ！？ぐっ！？反応が遅え…！？クソが！！」

シールドで私を弾き飛ばし、後退しながらレーザーの大半をかわすキュリオスだが何発か被弾している。

…ヤツはまだ本領が発揮出来ないのか？なら…！

「（早急に決着をつける！）はあああああ！！」

「ぐおお！？」

さらに瞬時加速を使い、勢いをのせた近接ブレードの突きを胸にあたる。

絶対防御が発動したのが手応えで分かった。

「このままい「かせるかよ！！」「」

奴は手で近接ブレードを掴むと脚についている飛行機の翼のような部分で膝蹴りを近接ブレードを持つ私の手に打ち込んだ！

「っ！？…くっ！」

思わぬ不意討ちに近接ブレードから手を離してしまった。奴はその隙にブレードを持ったままさらに後退した。

「ハッ！やるじゃねえか。楽しいね、まったく。「ピピピ」…ああ？……チツ、やっと面白くなってきたのに終わりかよ」

何かに悪態つきながら、奴は自分の武装をしまつと近接ブレードを私に投げ返してきた。

「…どういづつもりだ？」

近接ブレードを受け取り、奴を見ると奴は武装を解除していた。

「アア？やり合う意味が無くなったからな。キュリオスがテメえ等を味方と認識したし、相棒も目をさました…俺は寝る。詳しい事は相棒に聞きな」

そういつて奴が目を閉じ、次に開いた時には奴の雰囲気ガラリと変わっていた。

「あの、話を聞かせてもらえませんか？」

こうして、世界を越えた超兵は、
またしても事件に巻き込まれて
いたのだ。

第03話 戦闘（後書き）

一応の決着、次があるかはわかりません。

第04話 アドバイザー（前書き）

タグにあるそっくりさんが出てきます。

第04話 アドバイザー

アレルヤSide

あの後、僕はオリムラさんに連れられてIS学園という場所に来た。流石に街中をISで飛び回る訳にはいかないから車に乗っただけ。そして、今は窓のない部屋にいる。いわゆる、事情聴取とかにわかわれるような、そんな部屋だ。

「さて、いろいろと聞きたい事だらけだが…まずは自己紹介か。先にも言ったが、私の名は織斑千冬。この学園で教師をしている」

「アレルヤです」

机を挟んでお互いに向き合った状態、彼女の目付きが少し怖い。

「アレルヤ…か。性別は男で間違いないな？」

「はい」

「なら早速だが、なぜISに乗っていた…いや、乗れていた？先にも軽く説明していたがISは女性しか動かせない。そういうモノだ…その常識を破ったお前は私から…いや、世間から見ればかなり興

味深いのだが？」

「僕にもよくわかりません。あの場には偶然いて、興味翻意で乗っ
たら乗れた…それだけです」

その後も質問が続いた。上手く誤魔化してあつたけど、オリムラさ
んはどうやら僕がスパイか何かだと思っているみたいだ。

（なんとか誤解を解きたいんだけど…）

ばか正直に異世界から来ました、なんて言っても果たして信用され
るかどうか…

「聞いているのか？」

「あ、すみません」

いけない、深く考え過ぎた。話を聞かないと。

「アレルヤ…君はドイツ出身か？」

「いえ、違いますけど…なぜドイツだと思ったんですか？」

「いや、違うならいい」

…？、まあ本人が別にいいと言うならいいかな。

「とりあえず、しばらくの間は君の身柄をこの学園で拘束させてもらおう」

「……わかりました」

やっぱりそうなるよね。まあ、仕方ないのかな。

「食事等の心配はするな。だが尋問はするし、行動も制限させてもらおう」

（あゝあゝ…めんどくせえ事になってるじゃねえか）

（もとは君のせいだろう、兄弟。しかし、仕方ない事とはいえ、どうしたのか…）

（本当の事を喋っても信じて貰えないだろうしね…）

とりあえず、今日はこれで終了。僕は監視室のような場所に入れられた。部屋にはベッド、テレビ、トイレ、風呂がついていて普通に暮らせるような快適さだ。

「ふう…」

ベッドに腰かけ、テレビをつける。ちょうどニュースをやっていたので暇潰しと情報収集をかねて暫く見ることにした。

千冬side

自分のデスクの椅子に腰掛け、背もたれに背を預けて缶コーヒーを一口だけ飲む。

今の時刻は19時、太陽もとつくに落ちていた。

「はあ…」

自分から出た深いため息に、少し鬱陶しさを感じながら手元の資料を見る。

「ある程度は予想していたが…」

手元にある資料に目を落とす。名前と歳、後は身体的な特徴などが書かれていない。

そつ、この人物には出身や経歴が無いのだ。

「……調べたところで何か出るとは思えないしな……」

しかし…男でISを扱えるとはな。しかも厄介なのがその男が乗ったISが委員会の所有物ときた。

「あつちも今回の事に関しては伝わっているはず……」

そろそろ連絡が来てもおかしくはない……。まったく、心労がかさむ。

(…山田先生に任せたキュリオスの解析結果を聞くか)

なにせ男を乗せた初のISだ。かなり貴重なデータがとれるだろう。デスクの電話をとり、番号を押す。数回のコールの後、山田先生が電話に出た。

「山田先生、キュリオスはどうだ？」

『それが…コチラからのアプローチやコードをまったく受け付けて

くれません』

「つまり、解析不能か」

『はい。搭乗者が許可しないとデータ閲覧が出来ない仕組みのようですね』

やれやれ…厄介な事だ。仕方ない、彼に解除してもらおうか。そう思い山田先生にすぐに行く伝えて電話を切る。
そして職員室から廊下に出たら誰かに呼び止められた。

「失礼…織斑千冬先生ですね？」

「…どちらさまで？」

「はじめまして。わたし、国際IS委員会から派遣されましたキュリオスのアドバイザーを勤めます、リンダ・ヴァステイと言います」

金のウェーブの髪をした眼鏡をかけた物腰の軟らかそうな女性がそこには立っていた。

アレルヤside

「これでいいんですか？」

「はい、バッチリですよ。アレルヤさん」

今の時間は夜の21時をまわったくらい。僕は機械等が置かれた部屋：整備工場のような場所でキュリオスを起動させていた。この場には僕、織斑先生、山田先生、あとキュリオスのアドバイザーでリンダさんがいる。

「なるほど…幾つかのデータにロックがかかっているのね。それ以外はいたって普通のISと変わらない…。アレルヤさん、今回の起動でISを動かすのは二回目でもいいのよね？」

「はい、そうです」

「それでいて0・5秒をきる展開速度…キュリオスの搭乗者としてはバッチリね。後は貴方の戸籍や身の回りの問題かしら」

僕の前でデータの閲覧をしていたリンダさんがその手を止めて僕を見る。ていうか、まんま見た目が僕の世界にいたミレイナの母親、リンダさんだよ。

初めて会った時は驚いたけれど、相手の対応にあわせて挨拶を交わした。その時、この人がこの世界のリンダさんだと認識した。

「戸籍はどうにでもなるからいいけど…貴方のオッドアイは生まれ

つき？」

「いえ、過去にいろいろあって…生まれつきではないです」

「…そう。それにはドイツが関係してる？」

「ただ。織斑さんも言っていたけど、ドイツとこのオッドアイには何か因縁みたいなものがあるみたいだ。」

「…………なぜ、ドイツなんです？」

「なぜ、と言われても…貴方、ドイツでナノマシンをその眼に移植したんじゃないの？」

「ナノマシン…確か治療に使用したり、単体では自己治癒能力なんかがあるアレの事？」

「…違いますよ。この眼は…事故でこうなりましたから」

「そう、なら何も問題ない無いわ」

「リンダさんの態度からみても僕の嘘はバレバレだとわかる。けれど、今は見逃してくれるみたいだ。」

(…ドイツか)

調べる必要がある。僕の世界でこの目が指す意味…それは革新へと到った者が、あるいは…

(僕や、マリーのような者か…)

この二択しかないから。

そしてこの日はキュリオスの起動のみの運転となり、僕はまた部屋に戻って寝る事になった。

リンダ side

私はキュリオスの点検をした後、学園の来客用の部屋で通信をしながらくつろいでいた。

『ほう！男が動かしたのか！？』

「ええ、そうよ。私もびっくりしたわ」

『しかし、男が動かしたのもすごいが本当にキュリオスが動いたとは…いまだに信じられないな』

「本当なのよ、アナタ。データも今から送るから確認してみて」

電話の相手、私の最愛の夫であるイアン・ヴァステイにパソコンを使いデータを送る。

『お、きたきた。フム…なるほどな。明日は稼働させての模擬戦なんかをさせたいが…』

「そうねえ…。ハプティズム君が素直に頷いてくれたらいいんだけど…」

アレルヤ・ハプティズム君…物腰が軟らかそうで押しに弱そうな雰囲気があったけれど…彼、しっかりとした瞳をしていたわね。

「あ、問題がまだあったわ。ハプティズム君、戸籍や身の回りの物とか無いのよ。だから彼女に頼んでみてくれないかしら？」

『身の回りの物とはかく…戸籍が無いのはなんでだ？』

「…本人は話してはくれなかったわ。けど、調べた結果、彼に戸籍が無いのは本当だった。おまけに出身や生年月日とかの情報もね」

『…その、ハプティズム君とやらは本当に大丈夫なのか？』

予想はしていたけど、イアンはやっぱりハプティズム君を警戒しているみたい。

「私は信じてみたいわ。ハプティズム君の眼は嘘をついていなかったし、それに…」

『それに?』

「…アナタと私が作ったキュリオスが選んだ人だもの」

『……ハア…ワシの負けだ。リンダがそこまで言うならワシも信用しよう』

「ありがとう、アナタ」

『礼などいらんさ。…今日はもう遅い、続きは明日だな。それじゃ…おやすみ、リンダ』

「おやすみ、アナタ」

私は電話を切り、シャワーを浴びた後はベッドに横になってゆっくりと眠りについた。

第04話 アドバイザー（後書き）

次回は設定です。

設定 アレルヤとIS「キュリオス」について（前書き）

今回の設定は他の作者様と一緒に考え、作り上げたモノです。（自分
分が二割、相方様が八割）

そういった意味では合作といえるモノであり、この小説を書くこと
思えた理由でもあります。

なので、ここで一言だけ感謝の言葉を言わせていただきます。

ありがとうございました。

設定 アレルヤとIS「キュリオス」について

主人公：アレルヤ・ハプティズム

年齢：27歳

身長：186センチ

体重：68キロ

容姿：劇場版と同じ

IS適性： アレルヤ「B」 ハレルヤ「A」 レント「A」
アレルヤ・ハレルヤ「S」 アレルヤ・ハレルヤ・レント「SS」

性格：アレルヤの時 戦闘力（50）

原作どおり基本的に低姿勢。初対面の相手は多少警戒するので、相手からすると話しかけにくい。ただ自分に敵意が無い場合は、打ち解けて行くので人付き合いが苦手ではない。（未だマリーの事を想ってるので周りからのアプローチに困惑気味）

ハレルヤの時 戦闘力（75）

基本的に戦闘でハイテンション及び、気にくわない事態が起きた時にならないと表に出て来ない。攻撃的で他者の感情的な行為に否定的かつ現実的。

戦闘では常に強気、他者には命令口調。（立場とか無視）

（アレルヤとは逆にマリーに対して強い想いはない）

レントの時 戦闘力（70）

今回の話ではほとんどアレルヤとハレルヤのアドバイス、サポートをしていて表に出てこないが気まぐれに出てきたりする。魔法は滅多に使わないが自身のバリアジャケットをISスーッ化したり、いざという時は魔法を使う事もある。

超兵モード 戦闘力(100)

思考と反射の融合をやってる状態。原作との違いは言葉にしない点(変な人と思われるから)

滅多にこの状態にはならない反動が、一度変化すると半日は固定、稀に言動が一致しないこともある(戦闘後など)

真・超兵モード(???)

アレルヤ・ハレルヤ・レントによる思考、反射、魔法が一つになった状態。アレルヤとハレルヤの思考と反射の身体能力にレントの身体強化魔法でIS世界では人外の強さになる。

IS設定

機体名 : ガンダムキュリオス

機体色 : 全体的にオレンジ、一部白等(原作のキュリオスと同じ)世代 : 不明(一応は第三世代に定義されている)

機体の基本性能は第三に相当する。搭載武器で見ると第二という状態(第三世代兵器がないから)ただ武器(の一部)がビームなので、一応第三としている。

状態 : ファーストシフト

特徴 : 誰も起動出来なかった機体をアレルヤがコッチ(ISの世界)に來た時にデバイスを組み込み、起動させた機体。

元から高機動力での一撃離脱がコンセプトの機体だったのでキュリオスのデータがロードされた結果、外見と武装がキュリオスのモノに変化した。

動力はISコアがGNドライブのデータを取り込んで変化した「特殊なコア」で補給は必要ない。

展開方法は2通り存在し、通常展開時は一般的なIS同様に一部の

装甲のみ（頭はアンテナのみ、胴体、肩、肘から指先、膝から下で変形不可）

基本性能が高過ぎる為に、出力（強さ）を弱めた形態であり、強さは完全装甲時の約半分、50くらい。

フルスキン

完全装甲：アレルヤの意思で展開可能。元の世界のキュリオスに100%なりきる形態である。（顔も含めてなので当然ながら、変形可能）ガンダムの性能を完全に出し切る形態で強さは80。

武器：キュリオス初期登録武器（コレは他ISも使用可能）

GNビームサーベルx2

GNシールド（クロー&ニードルも含む）x1

GNビームマシンガンx1

ハンドミサイルユニットx2

遠距離誘導ミサイル（爆雷）コンテナx1↑完全装甲&MA形態限定

特徴：サーベルとマシンガンには元からエネルギーが入ってるので一定時間の使用は可能、切れたら返却&再チャージ。

シールドは普通に使える、ニードルは使い手のエネルギー消費ミサイルは片手が3門x10発って設定（両手なら6門x10発）

追加（製作）武器一覧 ↑他ISが使用できるのは実弾系のみ

IS「キュリオス」を調べた結果、設計図として登録されていた物。（読み込まれたデバイスが破損していたせいかデータの破損がはげしく、現在は第三世代の一部のみ）

GNソードx1（エクシア）サーベルよりリーチが長い為

GNブレイドS/L 各x1（ ）格闘&投擲用

GNスナイパーライフルx1（デュナメス）遠距離用

GNグレネードミサイル4発x4（デュナメス）ゼロ（近距離用）

腰の前に付いてる奴)

GNビームライフル×1(ナドレ)中〕遠距離用

GNキャノン×2(ヴァーチェ)中〕遠距離用 (手に持つて使う。肩に接続する事でGNフィールド強化可能、逆に射撃不可)

GNバズーカ×1(ヴァーチェ)遠距離用(胴体に接続すればバーストモード可能、チャージは5分)

特徴：現状で使えるのは「手に持てる武器」限定。一部の物は装甲を弄って取り付け可能。

ワンオフ・アビリティー：TRANS - AM トランザム

言わずとも分かるOOシリーズの代名詞。

使用する場合は「トランザム」と言う必要がある。これは完全装甲が前提条件であり、起動と同時に胴体の一部(第三世代ガンダム球状の所)にTRANS - AMと表示され、展開されてる装甲が全て紅く染まる。効果は機体性能を3倍に引き上げる物だが、システムが不完全なので時間が短く、5分で切れる。一度切れた場合、性能が元の半分に低下し30分経たないと再び使えない。ただし細かな切り替えは可能でトランザムのON/OFFが出来る。

ソレスタル・ヒーリング

待機状態：CBのマークが文字盤に付いた腕時計。色はベルトが黒、本体はシルバー。

ちよつとした機能として、脇のボタンを押すとCBのマークが浮かび上がる仕様。

ISスーツについて

ISスーツについてはレントのバリアジャケットを改造して使用している。おかげで従来のスーツより機能は遥かに上である。デザインは“リリカルなのは”のフェイト・T・ハラウンが使用するバ

リアジャケット、真・ソニックフォームを改良し男性でも着れるように下半身は膝まであるスパッツに変更したモノを使用している。これは後にレントが改良し、アレルヤが表の時は八神はやてのジャケット、ハレルヤが表の時はフェイトのジャケット、レントが表の時は高町なのはのジャケットに変更される。(主に色合いが変わる)

人格とか機体とかの性能を強さを数値化

アレルヤ + 通常キュリオス	50 + 50	↑授業は基本コレ
アレルヤ + 完全キュリオス	50 + 80	↑稀になる
ハレルヤ + 通常キュリオス	75 + 50	↑滅多にならない
ハレルヤ + 完全キュリオス	75 + 80	↑感情で暴走する場合
レント + 通常キュリオス	70 + 50	↑稀になる
レント + 完全キュリオス	70 + 80	↑アレルヤ、ハレルヤとい
きなり代わる		
超兵 + 通常キュリオス	100 + 50	↑気紛れでなる
超兵 + 完全キュリオス	100 + 80	↑プツンした時
真・超兵 + 通常キュリオス	?? + 50	↑殺さない程度に相手を倒す時
真・超兵 + 完全キュリオス	?? + 80	↑相手を殺す覚悟の時

上記にトランザム3倍で計算。

以下は作者でつけた数値。原作初期の段階としています。

織斑一夏 40 一般人

篠ノ之箒〓 50 剣道大会優勝の実力

セシリア・オルコット〓 45 お嬢様だが多少は鍛えている

シャルロット・デュノア〓 50 デュノア社ではテストパイロット
だった実力

鳳鈴音〓 55 常人より多少だが運動神経、反射神経が優れている

ラウラ・ボーデヴィツヒ〓 65 軍人であり、部隊を率いる程の実力

更識楯無〓 70 暗部の人間であり、更識家当主の実力

更識簪〓 40 姉への劣等感、内気な性格

織斑千冬〓 80 ブリュンヒルデ、教師としての実力

山田摩耶〓 60 元代表候補生、教師としての実力

ISの強さ。こちらも原作初期、あるいは初登場の段階の数値。

打鉄〓 30 量産機

ラファール・リヴァイブ〓 40 量産機

白式〓 40〜80 搭乗者のテンションで変動

紅椿Ⅱ50ⅸ80 搭乗者のテンションで変動

ブルー・ティアーズⅡ55 第三世代、ブルー・ティアーズを積載

ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡⅡ50 量産機のカスタマイズ機

甲龍Ⅱ55 第三世代、衝撃砲の積載

シュバルツェア・レーゲンⅡ60 第三世代、停止結界の積載

ミステリアス・レイディⅡ65 第三世代、搭乗者自身が制作に関わっている

打鉄式Ⅱ50 量産機のカスタマイズ機、搭乗者自身が制作に関わっている

キュリオス（通常）Ⅱ50 第三世代、ビーム兵器の積載

キュリオス（完全）Ⅱ80 第三世代、機動力、防御力の向上

設定 **アレルヤとIS「キュリオス」について（後書き）**

正直、強さの数値化は不安だらけです。

これは違っただろ、と思われる方は遠慮無しに指摘を下さい。

第05話 模擬戦（上）（前書き）

割かし早く出来たので投稿

第05話 模擬戦（上）

アレルヤside

「ふぁあ〜……ん〜…」

朝の6時、欠伸をしながらベッドで体を起こす。この世界に来て2日目、状況は変わらず、僕は要注意人物として扱われている。

「…ふう」

顔を洗い、服を着る。服は学園の人がジャージを用意してくれた。ありがたい事だ。

そうしてやる事が無くなった僕はまたテレビを見ようとベッドに腰かけた。その時、

ピンポーン！

と部屋のチャイムが鳴った。壁にある時計は6:30を表示している。

食事の時間かな、と思っていると部屋の扉が開き、現れたのはパソコンを持ったリンダさんだった。

「失礼するわね、ハプティズム君」

「あ、はい。どうぞ」

そしてリンダさんはパソコンを机に置くと部屋のソファアに座った。

「さて、私が此処に来た用件なんだけど…ハプティズム君。貴方が一定の条件や約束事を守ってくれるなら貴方の戸籍や身の回りで必要な物は全て、国際IS委員会が揃えてあげられるわ」

昨日の今日なのに対応が早い。

男がISを動かしたという事実は…この世界では重大な事態なんだ、と改めて認識するな…。

「…そうですか。どんな条件を飲めばいいんですか？」

身元不明の僕に対してここまで破格な条件を出して来たんだ。ある程度は覚悟した方がいいかも…

「委員会直属のISパイロットになる事、それが条件よ」

「……それだけ、ですか？」

「ええ、そうよ」

……拍子抜けだ。1人の人間の戸籍が組織に所属するだけで手にはいるなんて……。

「だから委員会から命令がきた場合、完璧とはいかなくても命令に従ってもらう形になるわ」

「他には？」

「もし、貴方がこの条件を飲んだ場合は約1年間はISの事について勉強したり起動させて慣れてもらい、その後はキュリオスを使つての模擬戦や試作武装の試験とか、広告塔とか、いろいろやつてもらう事になるわね」

……なんか今、変な言葉が混じらなかった？

「あの……広告塔、ていうのは何ですか？」

「ん？ちょっとまってね……。はい、コレ」

パソコンをいじったリンダさんが僕の方に画面を向けると、ソコに

はグラビアアイドルや女性のファッション誌の画像が沢山あった。

「この女の子達は全員、ISパイロットよ」

「え！？全員…ですか？」

「そうよ。ISは本来は宇宙進出を目的に作られたけど、残念ながらその能力は兵器としての運用に変えられ、今では過激なスポーツとなってしまったの。現存するISは様々な国に配られ、その国の独自の技術を用いて他の国より自国を有利にしようと日々研究しているわ。だけど研究にも開発にもお金が掛かるのは必然、だからISパイロットは適性が高く、容姿端麗な女性を選ばれやすいのよ。彼女達がISパイロットになるなら国の軍に所属するのは必然だし、数少ないISのパイロットになればその国では彼女達はアイドルを約束、あるいは強制されるわ。ま、今まで強制的にアイドルになった娘はいないけれどね」

「なるほど…」

リンダさんからの話を聞いて、僕は画面を見ながらオリムラさんから聞いていた話を思い出し、二つの話を整理する。

ISは篠ノ之束という天才が作ったモノでそのISに絶対に必要不可欠なコアの数は467機あり、それ以上は無いらしい。

理由は聞いてないけど中途半端な数だと思う。

そしてISは本来、女性にしか反応しないし扱えない。

僕は男でISを起動でき、扱える異例である。

そしてISを動かせ、国に所属するなら国の戦力とアイドルをやらなければならない。

男の僕がISを動かしたと知られたら凄い宣伝になりそう…かな？

「…リンダさん、僕の事を知る人はどれくらいいるんですか？」

「そうねえ…委員会上層部と私の夫、後は織斑先生とアリエス先生、山田先生…くらいね」

少数の人が知っている状態か。

…悩むなあ。もちろん条件を飲んだらこの世界での衣食住はおろか戸籍も仕事も手に入って安泰、だけど広告塔で有名人になるのはちよつと…

かといって、条件を飲まなかったら何も手には入らない。この世界でもサバイバルで生きてはいけると思うけど…危険が付きまといそうだ。なんせISを動かせる男なんて今は僕しかいないんだから、世界中から追われそうだ。

（飲むしかねえだろ、諦めろ）

（兄弟…嫌なのは分かるが仕方ないだろう）

（……君らにも広告塔やつてもらってから）

（（横暴だ！！））

（三心一体なのに他人事みたいに言うからだよ）

（チッ！俺は寝る！！）

(……………アイドルか…それも一興かもしれない)

ハレルヤはふてくされ、レントは広告塔に興味があるらしい。

……………仕方ない、今はこの条件を飲むしかないか。

「…わかりました。そちらの条件を受け入れます」

「そう…わかりました。じゃあ手続きをしてもらっわね。あと…その中に気になる娘でもいたかしら？」

…気になる娘？リンダさんニンマリと笑っている。言ってる意味がよくわからないんだけど…。

(兄弟、さつきからパソコンの画面を見続けているせいではないか？)

パソコン？……………あ、ああ！？画面が女の子の画像のままだった！

「…あ！？いや、別にそういうので見てたんじゃ…」

「いいのいいのよ。それで？どの娘かしら？」

「いや、ですから！」

この後、誤解を解くのに20分の時間を要した。

その後、リンダさんが正式な手続きをするからと部屋を出ていき、運ばれて来た朝食を食べ終えた後、僕はオリムラさんにアリーナと呼ばれる場所に連れて来られた。

「ハプティズム、君にはこれからキュリオスの性能を見る為に山田先生と戦ってもらう事になった」

「……………はい？」

「手順はアドバイザーのヴァステイさんに聞け。では、私は反対のピットに向かうから失礼する」

一方的に喋って、オリムラさんは扉の向こうに消えた。

「ふう……………織斑先生も気が早いというか……。ごめんなさいね、えと……ハプティズムさん」

オリムラさんを入れ違いでピットに入って来たのはハレルヤと戦った……誰だったかな？

「え、と…お名前は…」

「あ、自己紹介してなかったわね。私はこのIS学園で教師をしている、リース・アイリスよ。気軽にリースと呼んでね」

「アレルヤ・ハプティズムです。僕の事もアレルヤでいいですよ」

差し出された手を握り、握手をする。…黒髪で瞳が綺麗なアクアブルの女性だけど…

（それ以外はリン・F・アリオスにそっくりだ）

彼女の愛称であるリースが此方の世界では名前になってるのも驚きだ。

「長らくお待たせ。さて、これから模擬戦だけど…ハプティズム君、ISについてはどれくらい分かってる？」

少し遅れてきたリンダさんがノートサイズの電子機器を操作しながらコチラに来た。

「ほとんどわかりません」

知らないから正直に言う。別に嘘をつく必要もないし。

「あら、やっぱりね。男性でISに詳しい人なんてマニアか私の夫か、その道のプロくらいでしょうからね」

「えっ！？アレルヤ、初心者だったの！？」

「うん…。知識だけなら軽くオリムラさんから聞いたのと、キュリオスに触れた時に得たくらいだね」

「そうなんだ…織斑先生と少しとはいえ戦えていたから、てっきり戦い慣れてるのかと思ったわ」

リースの言葉にギクツ、とする。元の世界となのは達の世界を経てこの世界には来たから、戦いはお手のもの、みたいな感じになっている。

おまけにISは理論やモノは違うけどバリアジャケットみたいな感じだし。

「はは…そう言ってくれと嬉しいな」

…本当は、戦い慣れなんてしたくはなかったけどね。今さらだけど。

「それじゃ、相手を待たせるのも悪いし、始めましょうか。ハプテ

イズム君、コレを」

リンダさんがポケットから何かを出して僕の手握らせる。

「キュリオス…か」

手を開くと、ソコには腕時計があった。キュリオスの待機状態だと、オリムラさんから教わっていた。

「あ、待つて。その前にISスーツに着替えて来てちょうだい。急造品だけど更衣室に準備しておいたから」

ISスーツ…。確かあの水着みたいなヤツだよ…。アレを着るのは恥ずかしいなあ…。何とかならないかな？

（兄弟、私に考えがある）

（レント？）

（とりあえず更衣室へ行こう。話はそれからだ）

とりあえずリンダさん達と別れ、レントに言われるがまま更衣室にきた。

「それで？どうするんだい？」

「なに、簡単な話だ」

更衣室にある姿見に白髪紅目の僕…レントが映る。

「まずはこうする…セットアップ」

レントのバリアジャケットが展開される。何時もの黒いバリアジャケットだと思ったら…

「コレ…フェイトの真・ソニックフォームのジャケットだよな？」

「正解だ。ただし下は膝まであるスパッツタイプにしたから恥ずかしくはないだろう？それにバリアジャケットの方がISスーツより断然、機能が優れているしな」

姿見には体のラインにピッタリとフィットしたバリアジャケット姿の僕が映る。

「でも、リンダさんが用意してくれたのはどうするんだい？」

「ISにはISスーツも一緒に格納したり展開したり出来る機能がある。それを理由にして、初めからISスーツが格納されていた事にすればいい」

「なるほど…わかった。それでいい」

ピットに戻った僕はレントの言っただまの事をリンダさんに伝える。彼女はあっさりと納得してくれたので嘘がばれなくて良かった、と少し安心した。

「それじゃ、今度こそ始めましょうか。要領は昨日と一緒に」

「わかりました」

昨日と同じようにキュリオスを展開する。

「すごい…！初心者とは思えない展開速度ね」

「さすが私達のキュリオスね。いい人を選んだわ」

リースからは驚きの声を、リンダさんからはある意味では賞賛の声をもらった。

「キュリオス、武装展開」

僕の声に反対するように右手にビームマシンガン、左腕にシールドが展開された。

「ハプティズム君、武装に関しても口に出さずに展開可能かしら？」

「やってみます」

リンダさんに言われて口に出さずにビームマシンガンを収納したり展開したりする。パツと現れ、パツと消えるのはなかなか面白い。

「武器の展開も早い…」

「初心者でここまでやれるのね…。本当にセンス…。いや、才能ね。この順応の早さは」

なんだか誉められているみたいで照れるなあ…。

（まあ、この高速展開と収納は思考を司る兄弟だからこそなんだろう）

（レント…）

今日はレントがよく話してくる。いつもは寝てるのに…

「あ、山田先生が出てきたわ」

カタパルトの先にある戦いの場に緑色の機体が出てきて空中にとどまる。すると空間モニターが現れ、相手の情報が表示された。

「ラファール・リヴァイブ…」

凡庸性の高い機体らしいけど目立つ武装は特に無し。

ただ、油断はしない。乗り手次第では目立たない機体がとんでもない化け物になる事があるしね。

『そちらの準備はいいか？』

オリムラさんの声が通信機から聞こえる。リンダさんに視線を向けると静かに首を縦に振った。

「準備は出来ました。行けます」

『わかった…気楽にやれよ』

その一言を残し、オリムラさんからの通信は終わった。……怖そう
な人だけど、案外といい人なのかな？

「出撃のタイミングは貴方にまかせるわね。いいデータがとれる事
を期待してるわ」

「了解……。アレルヤ・ハプティズム、キュリオス。飛翔する！」

軽いGを身体に受けながら、僕は戦場に飛び出した。

第05話 模擬戦（上）（後書き）

アレルヤ、委員会所属を決める。

模擬戦相手は山田先生に決定。

次回はバトルです。

第06話 模擬戦（下）（前書き）

模擬戦の後編

第06話 模擬戦（下）

真耶 side

「お待たせしました、山田先生」

白とオレンジの装甲を纏ったハプティズムさんが私から少し離れた場所で止まる。

「いえ。それより本当に大丈夫なんですか？模擬戦とは言えどハプティズムさんは昨日、初めてISを起動させたんですよね？」

「そうですね…。多少の不安はありますが、今の自分の境遇を考えると流れに身を任せてみるのが一番だと思いますから」

あきれたような笑顔で肩をすくめるハプティズムさん。達観されているなあ…。

「あはは…大変ですねえ。それじゃあ、武装を展開して下さい。その後に織斑先生から説明があった後、カウントダウンして試合開始です」

「わかりました」

私はアサルトライフルのヴォルペ突撃銃を右手に握る。
ハプティズムさんはライフルを一丁とシールドを装備した。

『コチラは織斑。聞こえるか？二人とも』

「こちら山田、聞こえます」

「アレルヤ、聞こえてます」

『よし、ならばルールを説明する。ルールは簡単、シールドエネルギーが切れたら敗けた。武器は何をどう使おうと構わんが殺傷沙汰にはするな。以上、質問は？』

何をどう使おうと構わない、か…。

「「ありません」」

『では、カウントを開始する』

アリーナの中央に空間モニターが現れ、カウントが始まった。

4

3

2

1

ヒュン！バチィー！

「えっ！？」

カウント0と同時に風を切るような音がする。見ると私のラファールのシールドエネルギーが減少していた。

…いま、何が起きたの？

「見よう見まねだったけど…成功したみたいだね」

目の前にいたハプティズムさんの声が私の後ろから聞こえた。振り返ると、彼は先ほどと変わらない姿で私から少し離れた場所に止まっていた。

「今の…まさか、イグニッション・ブーストですか？」

「…そういう名前があるんだね。今は昨日のオリムラさんの動きを真似ただけなんだ」

何ともない顔で私に話すハプティズムさん。…信じられない。初心者で、それも見ただけでイグニッション・ブーストを使って制御するなんて…！
手加減なんてしてたら試合にすらならないかもしれない…

「織斑先生…」

『…なんだ？』

個人回線で織斑先生を呼ぶ。…声に陰しさがあるのを見ると、どうやら私の考えをよんでいるようだ。

「本気でいきます」

『わかった』

普段から掛けている眼鏡をESに収納し、代わりに目もとが隠れるゴーグルを展開する。

「ハプティズムさん」

「…本気、だね？」

織斑先生と話している間、私に攻撃してくる事もなく、彼はその場にいた。

おまけに彼の様子を見る限り、どうやら私が手加減しようとしていた事がわかっていたようだ。

「はい。…行かせてもらいます」

「いいよ。僕はただやるだけだから」

お互いに薄く笑みを浮かべて、戦いは始まった。

アレルヤ side

ギギギン！ギギギン！

「へえ…早いね」

僕は山田先生の銃から撃たれた弾丸を左腕のシールドで防ぐ。

「まだです!」

銃の次に出てきたのは箱に銃のグリップがついたようなモノ。引き金が引かれるとその箱から四発のミサイルが飛び出してきた。

「フッ!」

僕は全力で後退しながらビームマシンガンでソレを迎撃する。ミサイルは弾丸の雨をくぐり抜けそうになるけど、僕に向かってくるようになってるなら僕はこの一点から迎撃すればいい。的確は勝手に当たりに来てくれるからね。

ドドドドオオン!

ビームが当たり、爆発するミサイルから爆煙が広がる。相手が僕な
らこの場合…

「はあああ!」

「来ると思った!」

爆煙の中から剣を右手にコチラに突撃してくる山田先生。

ガキン！！

僕はソレを左腕のシールドで防ぎ、ビームマシンガンを収納してスカートからビームサーベルを抜き、突きを放つ。

「なんの！」

その突きを下がる事でかわす山田先生。
すぐさま左手にビームマシンガンを展開、撃とうとして…。

（下がれ！相棒！！）

（ハレルヤ！？くっ！！）

頭に響く怒鳴り声に従って僕自身も後退する。次の瞬間、僕のいた場所が爆発した。

「なっ…！？いったい何が…」

（あの女、抜け目ねえな。防がれる事も、反撃される事も予想して

手榴弾を用意してやがった)

彼女は既に次の攻撃の為に銃を握っていた。

「慣れない機体は疲れるね…」

(代わってやろうか?)

「いいさ。これぐらいの事で代わってたらきりがない」

(言うじゃねえか。なら気張ってやっちなまえ、相棒!)

ハレルヤの応援を珍しく思いながら、僕は考える。
勝つために、敗けないために。

千冬side

「…アレが初心者動きか?」

モニターを見ながら自問自答をする。

真耶と互角にやり合う程の腕を持つヤツが初心者とはとても思う事が出来ない。

だが、お互いのシールドエネルギーは少しずつしか減っていない。つまりはお互いの実力が拮抗している上に一撃を決めれる武装が無い、ということだ。

「…もしかしたら、真耶が敗けるかもしれんな」

モニターには苛烈な戦闘が写し出されている。真耶の動きには無駄が無いしキレもある、いつも通りだ。

だが、ハプティズムの方は時間が経つにつれて少しずつ動きに迷いや戸惑いが無くなり、代わりに動きが俊敏になり、フェイントじみた攻撃を織り混ぜてきている。

それに先に見せた瞬時加速…初心者がやれば必ず壁やアーリーナの世界にぶつかる技だがヤツは見事に制御していた。

しかもスピーカーから聞こえてきたセリフはとんでもない言葉だった。

「私の動きを見よう見まねでやってのけるとは…。貴様は何者だ？アレルヤ・ハプティズム」

その答えは当人しか知らないし、そう簡単には教えてはくれないだろう。

ならば今はその考えは捨て、どちらに転ぶかわからないこの戦いの結末を見届けるとしよう。

真耶 side

「はあ…はあ…」

「ふう…結構、つかれるね。大丈夫？」

「…大丈夫です」

試合が始まって既に30分が経過した。お互いに決め手が欠けたままシールドエネルギーだけが減っていき、私のラファールのエネルギー残量は遂に二桁に突入した。

（…おそらく、私は勝てない）

戦ってわかった。彼は私なんかよりずっと戦い慣れている。それこそ、アマチュアとプロぐらい差があるのでは…と錯覚させるくらいに。

（それでも…諦めはしません！）

ラファールも、私も、キュリオスと彼には及ばない。それにこれは模擬戦…だけど…

（負けたくは…無いです！）

展開していた武装を全て収納して、私は一振りの刀“リヒトメッサ”を握りしめて下段で構える。

「これで、決着をつけます！」

「ああ…いいよ」

彼はサーベルとシールドを装備し、構えもとらずに自然体のままになる。

「やああああああ！！」

「はああ！！」

私もハプティズムさんも、最後はイグニッション・ブーストで一気に斬りかかる。

ガキイイイイン……

一瞬の交差と金属が鳴り響く音がした後、私達はお互いに動かない。

ブーーーーー!!

試合終了の合図がアリーナに鳴り響く。結果は…

『勝者…アレルヤ・ハプティズム』

私の負けだった。

第06話 模擬戦（下）（後書き）

結果はアレルヤの勝ちでした。

次回もお楽しみに！

第07話 一時の別れ

アレルヤ side

サアーーーー……

模擬戦を終え、ピットに帰還してキュリオスをリンダさんに渡した後、僕は更衣室でシャワーを浴びていた。

「ふう……」

「やるじゃねえか、相棒」

「見事な戦いだっとな、兄弟」

備え付けの鏡に金と紅の瞳をした僕が写る。

「ありがとう……と、言っても所詮は模擬戦。本当の戦いとは言えなかったけどね」

「あ？何か不満なのか？」

「いや……なんでもないよ」

あの場合は確かに戦いの場所だろう。山田先生も本気だったみたいだし。けど…

（空気が緩いと思うのは、気のせいじゃないんだろうな…）

子供の頃から生と死が隣り合わせだった。戦って、相手を殺さなければ自分が死ぬ。

そんな世界で生きてきたから。

なのは達は多少、考え方が甘かった時があるけれど、それでも生き死にの覚悟を持っていた。

ISが軍に兵器として開発されておきながら主にスポーツにしか使われていないせいなのかもしれない。

「…今は考えても無駄、か」

シャワーを止めて体を拭き、シャワー室を出てジャージを着る。

「贅沢かもしれないけど…他の服もほしいな」

「そのうち委員会から金銭が支給されるのではないか？一応は委員会所属パイロット、という仕事なのだから」

「だといいけどね」

その後はリンダさん、オリムラさん、山田先生、リースと合流し食堂で軽い昼食となった。

ちなみに、今日は日曜日で学園の生徒は食堂にはいなかった。食事を終えた後は教師三人に連れられて僕は元の部屋に戻る。

「では、ヴァステイさん。我々は仕事がありますので失礼します」

「はい。委員会の協力要請に承えていただき、ありがとうございます」

簡単な挨拶の後、教師の三人は仕事に戻っていった。僕とリンダさんは部屋で今日の模擬戦のデータを整理する。

「あ、言い忘れていたのだけど…ハプティズム君に関する委員会の通達は少なくとも数日後にはくるからもうしばらく、この部屋で我慢してね?」

「わかりました」

(…特に問題ないけどね。この部屋も住み心地いいし)

その会話の後は特に話す事は無くて、僕はテレビを見る事にした。

「…このロック、外れないわねえ…」

「どうかしたんですか？」

テレビを見ているのも飽きてきた頃、リンダさんがパソコンとにらめっこをしているのに気づいた。

「ん？キュリオスにあったデータなんだけどロックがかかっているのよ。キュリオスを作った段階ではこんな不明データはなかったからハプティズム君がパイロットになった事で出来たデータだと思うんだけど…」

「どんなのですか？」

「これよ」

リンダさんからパソコンを受け取り、画面を見るとパスワードを打ち込む画面になっていた。

「……………ん？」

よく見るとパスワード欄の横に何か別の文字があることに気づいた。ソコに書かれていたのは…

第三世代、ソレスタルビーイング、チーム・トレミー、太陽炉。
…うん、間違いない。明らかに僕に、いや…ソレスタルビーイング
メンバーにしか分からないパスワードだ、コレ。

「リンドさん。このパスワードは何回か間違えても大丈夫ですか？」

「ええ、問題ないわよ」

「たぶん…答えはこれだろうね」

確信を持ってカチャカチャとキーボードを打ち、パスワード“GU
NDAM”を入力し、最後にエンターキーを押した瞬間、

ピー！

軽快な音と共にパスワードが解除され、データが表示された。

リンドside

「うそ！？解除できたの！？」

ハプティズム君からパソコンを取り上げると画面を見る。
ソコに表示されていたデータに驚いた。

「これは…！ハプティズム君、貴方はこのデータが何か解る？」

「いや…見る時間も無くリンダさんが…」

「あ、ごめんなさい。そうだったわね…じゃあ、改めて見てちょうだい」

ハプティズム君にパソコンの画面を見せる。

「…！。これは、何のデータですか？」

どうやらハプティズム君は何も知らないみたいね。無理もないわ…。

「このデータはね、委員会がキュリオスと同時期に制作を開始した機体とその武装のデータよ」

「キュリオスと、同時期に？」

「ええ…。制作される予定だった機体はキュリオスを含めて四機あったの」

「予定だった…。つまりまだ完成してはいないんですか？」

「鋭いわね。その通り、四機の機体は武装に類似点を持たせつつ、まったく違うコンセプトに作られる予定だった。けど、計画は頓挫したの」

「どうしてですか？キュリオスを見る限り、搭乗者以外には問題ないと思いますけど？」

「……此処じゃ話せないわ。貴方が正式に委員会に所属して、自分の地位を確立した時に改めて話すわ」

話を締めくくり、私はハプティズム君にお礼を言って部屋を後にした。

…何故、私や夫、委員会が作ろうとしていた機体の武装がキュリオスに入っていたのかは気になるけれど…

（キュリオスが制作段階の時には四機はまだ武装の案件もなかった。にも関わらず、キュリオスが持っていたのは完成された武装のデータ…）

ISは自己進化するモノ…。なら、この武装データは今のキュリオスが必要だから作り上げたモノ？

「イアンに相談してみないと」

私だけでは考えが纏まらない。私は急いで部屋に戻ってイアンに相談する事にした。

イアン side

「ふむ…」

ワシは妻のリンダから送られてきたデータを見て唸る事しか出来なかった。

「…“アイツ等”が作っていた武装データとISは極秘、しかも“あの事件”の後はキュリオスを除いた計画は抹消か凍結された筈だ…」

ワシでもアイツ等が作っていた機体や武装は初期の設計図とコンセプトしか知らない。

ソレをキュリオスは持っていた。

ハプティズム君にしか分からないパスワードでロックして。

「気にはなる。だが…こうも血が騒ぐのは、ワシも生粋の開発者、

「というわけか」

設計図を見ていると、実際に作りたくなってくる。それに、作っておいて損はないはずだ。

「あの計画はお互いの武器の共有化も目指していたからな。この武装もキュリオスは使える筈だ」

なら、作るとするか！

パソコンのデータをUSBにコピーし、パソコンの電源を落として部屋を出る。

「しかし…不思議なもんだ」

欠陥機といわれていたキュリオスが搭乗者を見つけて驚き、その搭乗者が男ときたから更に驚いた。

しまいには完成された武装データを自身に内包していた事にも驚いた。

「さあ、次はどんな事をやらかしてくれるのか…楽しみだ！」

未来の楽しみも見つけ、足取りも軽く、ワシは開発室へと向かった。

アレルヤ side

模擬戦の翌日の昼、僕はリンダさんと一緒にIS学園の校門にいた。

僕に関する案件の全てを国際IS委員会は承認。異例の早さで僕はISパイロットとしての職業を得た。

「山田先生、オリムラさん、リース、いろいろご迷惑を掛けました」

頭を下げてお礼を言う。たった数日間ではあったけれど、お世話になったのは事実だから。

「ええ、アレルヤも頑張ってたね」

「今度、戦う時は絶対に勝ちますからね！」

リース、山田先生と握手をかわし、僕はオリムラさんの前に立ち彼女を見る。

「…自分のこと、話せないままになってしまった事を、申し訳ないと思います」

「…ふう…お前がISを扱う以上、私とお前が何かで関わる事があるかもしれん」

腕を組んでいたオリムラさんが右手をさしだしてきた。

「ならその時、お前が話したくなったら話してもらおうとしよう」

「…はい」

「…あと、敬語はいらん。一応、お前の方が年上で、お前は一般人だ。普通に話せ」

「は…ああ、わかった」

「それでいい。…達者でな」

オリムラさんとも握手をかわし、僕はリンダさんが運転する車に乗り込み、IS学園を後にした。

N O s i d e

こうして、アレルヤは国際IS委員会に所属する事になる。
そして、この半年後に彼は再びIS学園を訪れる事になる。

織斑千冬の弟、織斑一夏が“ISを動かした男”として世に出た事
によって…

第07話 一時の別れ（後書き）

少し急ぎ足のような気もしますが、そろそろ原作へ突入します。

アレルヤの立場に悩む今日この頃。

案件は幾つかあり、

一つ、アレルヤが教師として学園に、

二つ、アレルヤが学園の用務員として学園に、

三つ、アレルヤが一夏の護衛として学園に

の三つですね。三つに共通するのは一夏の護衛が前提に入ってます。
アレルヤが生徒、がないのは歳が無理だからです。

どれにしよう？

第08話 青年と少年は出会う（前書き）

半年先に一気に飛び、アレルヤと一夏が出会います。

第08話 青年と少年は出会う

—夏side

「ぐはぁ……………」

机に突っ伏し、目を閉じる。

「やっぱり、きつついな……………」

冬の高校受験。あの日、本来の受験校とIS学園の受験を間違え、ISを起動させてしまった運命とも言える日以来、心休まるひとときはほとんど無かった。

連日のように記者やテレビ局が家に来るし、某国からスカウトが来るし、友人知人からの電話はひっきりなしにくるしで正直まいつてる。

「今だってテレビは俺の事ばかりだし…」

テレビをどのチャンネルにしても俺の事を報道していた。

「ただいま」

「あ、おかえり。千冬姉え」

机から顔を上げると俺の姉、織斑千冬が鞆と紙袋を手に居間に入ってきた。

「帰ってくるなら連絡してくれって何時も言ってるじゃないか。晩飯、用意しようか？」

「お前は口うるさい奴だな…。晩飯は食べてきた。それと、お前に土産だ」

千冬姉えはそう言って紙袋を俺に渡してきた。中は服みただけど…不思議に思いながら千冬姉えを見ると、

「それはお前の制服…IS学園の制服だ」

……………はい？

「不思議な事じゃない。今のお前の立場はISを動かした男として世界中から注目を浴びている。その男を手に入れようとするヤツは

数知れずだ。IS学園は世界中から…少なくとも三年間はお前を守ってくれる。ちなみに拒否は出来んぞ。入学の申請は済ませてあるからな」

そう言つて千冬姉えは冷蔵庫から缶ビールを出して飲み始めた。しかしIS学園かあ…。千冬姉えにあんまり負担を掛けたくないから授業料の安い高校に行きたかつたけど…仕方ないか。

ピンポン！

「ん？こんな時間に誰だろ？はーい！」

「…一夏、私が出る。座っている」

玄関のチャイムが鳴り、俺が行こうとすると千冬姉えに止められた。

「千冬姉え？」

「よくない輩かもしれんからな」

そう言つて千冬姉えは玄関に向かって行つた。

…まったく、千冬姉えは心配性だなあ。

そんな事を思っていると玄関から話し声が聞こえてきた。

「こんばんは、オリムラさん」

「お前は…何故、此処にきた？」

「貴女の弟…一夏君と貴女に用事があつてね」

声からみて男の人みたいだけど千冬姉えならともかく、俺に用件？
ISがらみなのは間違いないな。

「……分かった。入れ」

「お邪魔します」

お、どうやら家に入れるみたいだな。お茶と茶菓子を用意するか。
台所に入って茶葉を急須に入れ、お湯を入れて棚から茶菓子を出し
たところで千冬姉えが居間に入ってきた。

「……相変わらず手早いな、一夏」

俺の行動を見て、浅くため息を吐く千冬姉え。
そりゃ手早くもなるさ。千冬姉えは礼儀とかはちゃんとしてるけど
お茶とか淹れられないし。

「ははは…。千冬姉え、お客さんは？」

「ちゃんという。ハプティズム、こいつが私の弟。織斑一夏だ」

そして居間に入ってきたのはスーツをピシッと着こなし、身長が190前後位の眼鏡をかけた優しい男性だった。

「君が一夏君か。はじめまして、僕の名前はアレルヤ・ハプティズム…なんだけど、もしかして、お邪魔だったかな？」

「ああ、気にするな。お前に茶を淹れてるだけだ」

「ああ…気を使わせたみたいだね、ゴメン」

「いえ！とりあえず座って下さい。お茶も直ぐに持って行きますから！」

「ま、そういうわけだ。とりあえず座れ」

「分かったよ」

千冬姉えに促されて居間のソファアに座るハプティズムさん。
俺はお茶と茶菓子をお盆にのせて持っていく。

「どうぞ」

「あ、お気遣いありがとう」

アレルヤさんは軽くお辞儀をしてくれた。

礼儀正しい人だなあ。

千冬姉えにもお茶を出し、俺はハプティズムさんの対面、千冬姉えの隣に座る。

「さて、此処に来た理由を話して貰うぞ。ハプティズム」

「アレルヤの方で呼んで下さい。ハプティズムは…いろいろある名前なので」

ハプティズムさん…アレルヤさんはお茶を一口飲むと真っ直ぐこちらを見て口を開いた。

「単刀直入に言うよ。今回、僕が此処に来たのは一夏君、君の身辺警護の為なんだ」

「俺の…身辺警護？」

アレルヤさんは黙って頷き、話を続ける。

「一夏君が“ISを動かせる男”のパイロットとして世に広まってしまい、成人もしてない事から国際IS委員会は僕を君の警護につ

ける事を決めたんだ。でも、そんなに大事に考えなくていいよ。四六時中、君の傍にいるわけじゃないからね」

「フム…確かに男のお前なら一夏の警護には適任か。私としてはお前の身元が解れば更に安心なんだがな」

「あはは…キツいなあ」

千冬姉えに睨まれたアレルヤさんは苦笑しながら肩をすくめる。
てか、千冬姉えが認める男の人なんとそうはいない。そう考えると、アレルヤさんは凄いい人なんだろうな。

「そんな訳で…僕もIS学園に配属、というよりは学園で働く事になったんだ。その前に警護する人物に会っておきたかった。コレが今日ここに來た理由さ」

アレルヤさんが立ち上がり右手を差し出してきたので俺も立ち上がりその手を握る。

「これからよろしくね。一夏君」

「えっと…いろいろお世話になります。アレルヤさん」

握手をかわした後、アレルヤさんは帰って行った。
ちなみに、アレルヤさんがいない時は影から護衛がつくらしい。

俺のプライベート、大丈夫かな……

アレルヤside

織斑家を後にし、車を運転して宿泊先のホテルに戻る。

「ふう。……………ん？」

そして自分の部屋のドアノブに手をかけた時、違和感を感じた。
僕は懐から銃を出し、ゆっくりとドアノブを回し、静かに部屋に入る。

「……………誰だ！」

部屋に入ると誰かの気配がした。だから僕は銃を構えて部屋に跳び入ると窓際に誰かが立っていた。

「…はあ、君か。脅かさないでくれ」

「……………」

その人が振り返り、それが知り合いと分かった僕は銃をしまい、ネクタイを緩めて上着をハンガーにかける。

「新たなミッションを伝えに来ました」

「…まったく、人使いが荒いなあ」

彼女に向き直ると彼女は僕の目の前に立って手を差し出していた。僕は腕時計…待機状態のキュリオスをその手にのせる。

彼女は待機状態のキュリオスを床に置かれていた鞆からコードを引き出し、接続した。

「キュリオスのガンダムモードの使用を許可。カラーリングを黒に変更…完了しました」

「それで、今回のミッションは？」

調整が終わったキュリオスを彼女から返してもらい腕につけなおす。

「今回のミッションは以前と同じく、麻薬の栽培地を焼き払ってもらう任務です。座標と爆撃時間はキュリオスに入れておきました」

…このミッションとは、国際ＩＳ委員会と国連の上層部が秘密裏に行っているモノで密輸入や麻薬畑の焼却、過激なモノになればテロリスト殲滅などもあったりする。

委員会は僕のキュリオスの秘匿性、そして男がＩＳを動かせるという非常識を利用して大規模な麻薬畑の焼き払いを命じる事が多い。どうやら今回も同じような任務みたいだ。

「分かった。それじゃ、一夏君の方は頼んだよ。フェルト」

「わかりました。アレルヤも気をつけて」

彼女はそう言い残し、部屋を出ていった。

…彼女の名前はフェルト・グレイス。彼女も僕の世界のフェルトと名前も容姿もそっくりだった。

「ほんと…この世界は知り合いにそっくりな人が多いよ」

ホテルの屋上に出て辺りを見回す。普段、この屋上は鍵がかかっているがその辺りは既に手を回していて鍵は開いていた。

「じゃあ、頼むよ。レント」

「分かった。セットアップ」

バリアジャケット（八神はやてバージョン）をセットアップ。続いてキュリオスを展開する。

「キュリオス、ガンダムモードへ移行」

僕の言葉に反応して今まで露出していた顔や肌の部分が全て装甲に覆われていき、本来の姿、ガンダムキュリオスの姿になる。

「アレルヤ・ハプティズム目的地に向けて飛翔する」

フワ…と浮き上がり、人の目では見えない雲の上まで上昇、戦闘機変形してそこから一気に加速。目的地へ向かう。

キュリオスの黒いカラーリングのおかげで目視はかなり困難だろう。

（また下らない任務かよ、アレルヤ）

目的地に向かう途中、ハレルヤが話しかけてきた。

（下らない事はないさ、ハレルヤ。麻薬が無くなるのは良いことだし…）

（平和の為か…理解は出来る。だがこの平和が長く続くとは思えん

な)

レントの言っていることは分かる。ISが現れてからこの世界は女尊男卑が主流になってしまって、そこに織斑一夏が男なのにISを起動してしまった。

…ソレが意味するのは、仮に彼以外にも男性がISを動かせるようになってしまったら…最悪、戦争が起こりかねない。

(良くも悪くも、世界は動き始めるよ)

(そんでえ？俺らはどうすんだ？)

(望ましいのはあまり介入しない事だな。それと厄介な連中に目をつけられないようにする位だろう。だが…)

(火の粉が飛んで来たなら払うけどね)

(そうかい。ま、難しい事はお前らに任せるわ…。そろそろ目的地上空だぞ)

(了解。仕事を始めようか)

通信を解放。粒子変換していたミサイルコンテナ(ナパーム掲載)を装備し、変声機能をONにして辺りに向けて僕は呼び掛ける。

「座標XT、08付近にいる者に警告する。……こちらはソレスタ

ルビーイング。貴君らの行動を良しとしない武装組織である。今から30分後に爆撃を開始する。死にたくなければ即刻、現地より退去せよ。繰り返す、こちらはソレスタルビーイング。爆撃で死にたくなければ30分以内に退去せよ」

言い終わり、通信を切る。ちなみに、ソレスタルビーイングとは作戦行動をおこなう際に僕が勝手に名乗っている、こちらの世界には存在しない架空組織だ。

「30分後

「時間か…爆撃を開始する」

警告した時間を過ぎたのでナパームを投下して麻薬の栽培地を焼き払う。

「ミッション完了。帰投する」

目標の麻薬畑を焼きつくし離脱して帰路につく。後は帰るだけだ。今は海の上で月明かりがとても穏やかな雰囲気を出している。

だけど…

<警告！未確認ISが12時の方角から此方に接近！>

「…なに？」

そんな雰囲気を打ち壊すヤツが現れた。

<警告！未確認機、此方をロックしました！>

「回避！」

空間モニターに警告が表示された瞬間、光が見えた。僕は咄嗟に機首を下げると真上を何かが通過していった！

（ハッ！いきなりご挨拶じゃねえか！！）

（秘密作戦でバレる訳にはいかない。このまま離脱する！）

戦闘機形態のまま海中に飛び込もうとするけど…。

（私が相手をする）

（レント！？）

レントが強引に表に出てきてキュリオスを加速させた！

レントside

アレルヤを押し退け、表になった私はキュリオスを加速させる。

「見られたからには…」

おそらく、相手はハイパーセンサーで此方を見つけているはず。
そのデータを持って帰られるのは不味いからな。
だから…

「死んでもらう」

前方からは雨のように銃弾が飛んでくる。
これで武装が2つはある事が分かる。

「戦闘機形態、解除」

戦闘機から人型へ可変し、勢いをそのままに相手へと突っ込んでいく。

「覚悟！」

左腕に装備しているシールドの先端部を相手に向け、突きを繰り出す！

ギャリン！！

すれ違いざまに金属同士が擦れるような音が鳴り、私はそのまま振り返りもせず、その場から離脱する。

（なんだ？殺らないのかよ？）

ハレルヤが私に話かけてきた。

相手が追ってこないのを確認してキュリオスを通常の数値に落とす。

「…相手は一筋縄じゃないみたいだ」

脚の飛行翼を見る。飛行翼の中心辺りに何かが貫いたように丸い穴が開いていた。

（あ？）

「仲間がいたらしい。すれ違う時にやられた」

（…う…：レント、いきなり代わらないですよ…）

前準備もなしにいきなり代わったせいかな、軽く気を失っていたアレルヤが話しかけてきた。

（すまなかったな。……しかし解せない。なぜ相手は私たちのいる座標を知っていた？）

（それ以前に、俺らを待ち伏せてやがったみたいだったかな。つまり、俺らの帰路ルート、更には今回の作戦とかがバレしているって事だ）

ハレルヤの言う通り、相手は警告も無しに攻撃してきた。国が介入してきたなら警告があるはずだけど、それは無かった。

（ともかく、上に報告しないとね）

再び戦闘機形態になり周囲を警戒しながら、私は帰路についた。

?side

レールカノンの照準からキュリオスが消え、私は戦闘態勢を解く。

「はあ…フラれてしまいましたか」

キュリオスの反応は消えてしまい、私はガツカリした。

「あの時できなかった戦いを、と思ったのですが…」

やはり断られてしまいましたか。…あの時、戦えなかったのが惜しまれますね。

「シュテル、お遊びが過ぎるよ」

私の近くに寄ってくる白の機体に少しでも視線を向ける。

「貴女が邪魔をしなければ楽しく闘えたというのに……レヴィ」

「独断専行したシュテルが悪いんだから文句いわないでよ。……ほら、早く帰るよ」

白の機体が帰投するのを眺めながら、もう一度キュリオスが飛んでいった方向を眺める。

「仕方ありません。今回もおおあずけですね」

物事は諦めも肝心と思い、自分の漆黒の機体を翻し、私はその場を後にした。

第08話 青年と少年は出会う（後書き）

立場は明確にしません。がアレルヤがIS学園に派遣が決定されました。

そして、フェルトの登場。敵とおぼしき人物には黒いISにシユテル、白のISにレヴィ、が明らかに。

キュリオスの扱いがどうなるか…お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5086w/>

「IS」《空を駆ける超兵の話》

2011年12月26日22時19分発行